

2019年度 入学試験問題

国 語

(第2回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

受験数学の頂点であり、日本の学校教育の算数・数学の一つの目標地点に位置すると思われる東大の大学入試が求めている力とは意外に、文系にも必要な文脈力です。数式の隙間(すきま)でちゃんとつないで埋める作業です。

数式は究極的に言葉だというところがあつて、極端(きょくたん)に言えば、「 \sim は \sim である」というときの前後二つの「 \sim 」を、左辺と右辺にそれぞれ書いてイコールで結ぶ式が立てば、それでオーケーなんですね。

たとえば食塩水問題のような文章問題があります。私には「集合」のように小学生の時にシヨックを受けた算数的な考え方(おどろ)にかんする驚きの記憶(おぼく)がもう一つありまして、^①それは□(未知数)を使うということでした。中学以降でいうと未知数の x にあたるものです。

これは、わからないものにとりあえず□を当てておいて、それをもとに左辺をつくり、これと右辺をイコールで結ぶことを考えましようという発想です。食塩水問題でいいますと、Aのカップには何パーセントの食塩水がどれくらい、Bのカップにはどれくらい、AとBを左辺に置いて、これをイコールで結んだ右辺には、二つのカップの中身を一緒にした(いっしょ)場合に何パーセントの食塩水がどれくらいあるかという数値を導く問題です。問題としては、^②食塩水Aに食塩水Bを合わせたら何パーセントの食塩水Cがこれだけできました、では、食塩水Bはどのくらいあつたのでしょうか、というような問題にするわけです。

この手の問題は、一個一個の式を立てて解いていくこともできます。でも、方程式というものは、わからないものを^aメイジ的に表し、左辺と右辺がイコールで結ばれる式を立てたらそれでは基本的に終わりです、あとは計算が残るだけです。これに対し、チマチマとAの食塩の量を出し、次にBの食塩の量を出しというふうにやっていると、最後は解けますが、絶対に解けるといえる信がないまま宙ぶらりんの状態で解き進めることになる。つまり、不安なまま階段をのぼっているような状態ですね。そして、最後までいって「ああようやく解きました」ということになる。それに対して、□、すなわち x を使う解き方というのは、わからないものの数値はわからないままですが、数値として存在していること自体はつゆも疑っていません。今はまだわからないけれども、いずれわかるというのが□、あるいは x なんです。

問題が解けるポイントが何かを考えると、大切なのはイコールの設定にあります。食塩水というのは、混ぜた後も食塩の量は変わらないという着眼点(てんてん)がイコールという記号になります。化学変化か何かで、混ぜ合わせたら結合して減ってしまうとか、あるいは消えたり増えてしまう物質だったら、どうしたってイコールにはなりません。あるウイルスがあつて、別種のウイルスがあり、二つを合わせたらどうなるでしょうという時に、相互(さうご)に食いつたり増殖(ぞうしよく)したりするウイル

スがあるとしたら、答がゼロになったり、逆に増えることだってあるわけです。これでは問題そのものが成り立ちません。食塩水問題の基本は、混ぜ合わせても食塩の量が変わらない、食塩の量はいつも一定であるという認識を式にするところにあるわけです。

未知数をあたかもわかっているものとして設定して、二つの別々な意味を、イコールで結ぶ。この作業はきわめて知的です。あとの作業の見通しがすでにできている。

□や x を使って解こうとする場合には、式を立てた瞬間にあとは計算で解けばよいということがはつきりしますから、これで一段落だと安心できる。□や x が一つで、式が一つだったら必ず解くことができるし、わからないものが二つあったら x と y と置くわけですが、これは未知数を x と y と置いて式が一つなら絶対解くことができないので、その場合は、出どころの違うところからもう一個別の式を出してこないといけない。

ですから、あるネタがあつたとしてそれを式の形に変換する時に、わからない数が式より多ければ、どこまでいってもそのネタの範囲にとどまって答が出ません。そうではなくて、まったく別のところからネタを引き出してきて、そこから二つの式をつくり、それを組み合わせた連立方程式にしないといけない。同じように、わからないものが三つあれば、それぞれを x と y と z として、別種の式を三つ立てて解くことになります。

これが連立方程式の考え方ですが、このルールがあることを知っていると、安心して問題に取り組むことができます。「賢い解答の仕方」的な言い方をしますと、「あと一つ式が立てばいいという時には、問題文をよく読めば必ずヒントが書いてあるはずだから、もう一度まっさらな気持ちで読んでみよう」ということになるわけです。

文章題のいいところは、問題文の中に解答作成に使わない情報はないということです。逆に言う問題文に暗示されている要素を、全部使わなければいけません。問題文に何かが書いてあつたけれど、解くのに必要ありませんでしたということは、ほとんどないわけですね。

答が何であるかという前に、答があるのかどうかを知っておくことは、非常に重要です。私が受けたある年の司法試験で、ある問題に対する正答がないということがありました。これはほんとうに嫌な経験でした。大学入試センター試験のように、どこかに必ず正答があるなら消去法でつぶしていくという方法があるけれども、正答がない質問もありますといわれてしまうと、消していくたら全部消えてしまうような気がするし、とても不安になります。

算数や数学の問題のよさは、問題文に表れている要素は全部使い切る必要があるという「正々堂々感」にあります。今二つの要素を使って第一の式をつくった。それに対して、ほかの要素がまだ残っている。そういう時は、それを全部利用して第二の式をつくればいいという見通しが立つ。そうすると、式は二つで未知数は x と y なので、あとは計算で解くことができる。これは、式を立てることに力を使ったのであって、計算力は使っていないわけですね。極端にいうと、式を立てる能力があれば、「計算はできる人がやっておいてね」ということで、大きな問題はないわけ

す。たとえばコンピュータを使えば、答は瞬時に出てくるわけですから。

このように式が立てば、解ける人ならたくさんいますが、^⑤ものごとの全体を俯瞰してポイントを押さえ、式を立てて問題の構造を示すというのは、なかなか難しい作業です。会社の仕事でいいますと、文章題の文章を読み込んで式を立てるところまでがリーダー、それ b イコウの計算は、アルバイトの人も含めているんなスタッフが担当するようなものでしょう。この分担は必ずしも役職によって決まっているわけではないですから、方程式を立てることができる人がいれば、身分上は誰かの部下であっても、実質上はリーダーになることはめずらしくありません。

文章題というものには、与えられた条件を最大限に使って、ポイントを押さえた式をつくるという快感があります。ですから、大人になって仕事をするようになり、いろいろな条件をヒントとして組み合わせ、左辺と右辺をイコールで結ぶ方程式的なものを立てるといふこと、つまり、複数の要素をどうしたらイコールで結ぶことができるのかと考えなければいけない時に、数学的な発想を使えば、ある種の快感を得ながら仕事を進めることもできます。

(中略)

方程式が立っていれば未知数の x を求めていくことができるけれども、どこにこういうヴィジョンがない時には、技術者に向かって何かいい技術がないかと言うだけで、どうすることもできません。需要を意識したヴィジョンが、方程式を立てるには必要なのです。

ある具体的な問題があつて、それを解くために問題全体の構造を考えなければいけない場合に、社会はこういう状態にありマーケットは冷え込んでいる、我が社にはこういう技術やノウハウがあつてあつたらしい技術を開発しようとしているが、まだ残念ながら間に合っていない。そういう状況で、現状の技術力を使ってマーケットの要求に c コタえるとすると何が可能で、どんな方法をとればあまりコストをかけずにできるんだろうという難題に直面したとしましょう。

ふだんから算数や数学の問題作成者が問題をつくるようなイメージを持って考えている人は、実際に式を立てるわけではないけれども、何を埋めればいいのかを x にして、それをめぐる状況を構造的に思い描いてみるのが可能になります。すると x 、つまり、求められている答が何かということも、比較的是つきりさせることができるのです。

ですから、自分たちに足りないものがわからない場合でも、とりあえず \square や x という形で未知数扱いにして、ブラックボックスの中に置いておくといい。そして何を入れればいだろうと考え、そのパーツは何かと思いつくと、自分たちの組織にはこういう技術を持っている人がいないから進まないのではないかといったことが具体的な形で見えてくる時があります。つまり、今の自分を取り巻く構造を式にしてみることによって、逆に \square や x がクリアになってくるわけです。そうすると、採用とか、^{*}アウトソーシングとか、あるいはヘッドハンティングで外から誰かを呼ぶという時も、自分たちがほしいのはこういう人だという非常にクリアな人物像が浮か

できますし、そこまでくれば、この人がいいじゃないかとアプローチする。タイショウを絞^{しほ}り込むことができるわけですね。

以上のことは、漠然^{ぼくぜん}と作業チームをつくるだけでできることではありません。見えない関心事を x と置き、全体の構造を図に描き、方程式を立てるといふ問題解決の手立てを考える能力、あるいは常に動いている現実の状況を文章題のように書けるといふ能力があつてはじめてできることです。

書くといつても別に原稿用紙一〇〇枚に書き出せというわけではありません。むしろ三、四行で簡潔に書き、このことについて共通認識が得られますかとメンバーやスタッフに確かめ、もし得られるのであれば、大筋でこの方向に進みませんかと提案するという話です。そうすれば現実を多くの条件のセットとしてとらえ直すことができますし、わからないものをつけ加えた暫定的^{ざんていてき}な完成予想図をつくることだってできるわけです。そこから足りないものを見つけ出して探^{たん}しにいたりするのが、現実の仕事というものではないでしょうか。

こういった手順は、まさに文章題を解いていく手順と同じだと思います。文章題を解くにあたつてのこういった操作は、誰でも小学校時代からずっとやってきているはずですが、大人の社会では意外に意識されていません。意識せずに活用することはできませんから、ちよつと気をつけるだけでも、ずいぶんよくなるのではないかと思いますね。

(齋藤孝『数学力は国語力』より)

(注) ※俯瞰……高い所から見おろすこと。

※アウトソーシング……外部から必要なものを調達したり、仕事をまかせたりすること。

問1 —— 線 a r d のカタカナを漢字で書きなさい。

問2 —— 線①「それは□(未知数)を使うということでした」について、

(1) 文中には「□(未知数)」を用いることの利点が述べられていますが、その利点としてふさわしくないものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 数式を立てることができる。
- 2 誤りなく計算することができる。
- 3 正解の存在を明らかにできる。
- 4 漠然とした考えを具体化できる。

(2) 反対に、「□(未知数)」を用いないで答を出すようすを、たとえを用いて表現しています。その部分を文中から十字以内でぬき出しなさい。

問3 ——線②「食塩水Aに……あったのでしよう」について、

(1) この問題が成立するために、食塩水について言えることは、どのようなことですか。その内容を述べている部分を文中から十五字でぬき出しなさい。

(2) この食塩水の問題を解くためには、次のような知識が必要ですが、これを参考にして後の問いに答えなさい。

$$\text{食塩水の濃度 (\%)} = \frac{\text{食塩の重さ}}{\text{食塩水全体の重さ}} \times 100$$

ある中学の入学試験で「8%の食塩水200グラムに食塩を追加して15%の食塩水を作りたい。何グラムの食塩を追加する必要があるか求めなさい」という問題が出されました。次の空らん A・B を埋めて、この問題を解くための方程式を完成させなさい。ただし、追加する食塩の量を x とするものとします。

$$15 = \frac{A}{B} \times 100$$

問4 ——線③「このルール」とありますが、どのようなルールですか。十字以内で考えて答えなさい。ただし、「未知数」ということばを必ず使い、「というルール。」につながるようになさい。

問5 — 線④ 「正々堂々感」とありますが、その説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 算数や数学では、問題文中に必要な情報が必ず含まれていなければならないということ。
- 2 算数や数学では、問題文を読み解く能力以上に論理性や計算力が優先されるということ。
- 3 算数や数学では、問題文が明快なだけに純粋に数学的能力の有無が問われるということ。
- 4 算数や数学では、問題文の解釈次第で答が変わるようなあいまいさはないということ。

問6 — 線⑤ 「ものごとの全体を俯瞰して」とありますが、これはどういう能力のことを述べていると考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 人道的にものごとを解決する能力。
- 2 大局的にものごとを把握する能力。
- 3 客観的にものごとを伝達する能力。
- 4 論理的にものごとを分析する能力。

問7 この文章では、数学が一般的な物事にも通じることを述べています。それは、数学のどのような方法が、どのようなことにつながるということですか。「と」に続くように、六十字以内で説明しなさい。

(下書きらん)

50	30	10
60	40	20

とごういせ。

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公（私）が通う東松学園高校女子剣道部は全国レベルの強豪校である。春の関東大会神奈川県予選団体戦も破竹の勢いで勝ち上がっていた。しかし、迎えた四回戦の試合直前に先鋒を務める一年生磯山が階段から転落し、怪我を負ってしまう。チームの危機に皆は意気消沈していた。

「ちょっと」

ふいに後ろで声がした。振り返ると、いつのまにか磯山さんが、ベッドから下りて立っていた。

「……どうせ先鋒戦捨ててかかるなら、あたしにやらしてくださいよ」

先生が、呆れたように鼻息を吹く。

「お前は無理だといっただろう。お前の場合は勝ち負けじゃなくて、健康管理の問題なんだよ。大人しく寝てろ」

「だったら」

A、その目つきが険しくなる。

「……先鋒は、西荻でお願いします」

「えっ」

背後からの不意打ち。重く、それでいて鋭い衝撃。

前からは、全部員の、刺すような視線。

「ちょっと……磯山さん、何いってるの」

「お前だって補欠だろ。一つも声かからないで、ほけーつとしてんじゃないよ」

「しかし磯山……」

先生の言葉を、彼女は右手で遮った。

「じゃあ先生、あたしの腕が動いてたら、あたしを出してくれましたか」

しばしの沈黙。

② 先生は、どういふべきか迷っているようだった。

「何が、いいんだ……そりゃ、腕が無事なら出すさ。そもそも、オーダーの変更は利かないし、お前なら……まあ、負ける可能性だってあるが、逆に勝つ可能性も、ゼロじゃないからな」

「だったら、やっぱり西荻で」

やめてよ、と思ったけど、全然、声も出せなかった。みんなも、なんか変な顔つきで固まっている。

「……あたし実は、こいつに負けてるんですよ。去年の秋に」

エエッ、といったのは、飯野さんと、田村さんだ。

「ちょっと磯山さん、それはだから、まぐれだって……」

それでも彼女は「いや」と首を横に振った。

「確かに負けたんです。脳天に、正面打ちを決められて。それに 河合さん。あなただって、西荻に二本取られて負けたことあったでしょう」

河合さんが、真剣な顔で頷く。確かに、そういうこともあったけど――。

「ほんとは強いんすよ、こいつ。でも、得手不得手があったり、気持ちにバラつきがあったりで、ちよつと、今んとこの印象は、アレかもしれないですけど、でもやるるときややるんすよ」
私も何かいおうと思ったけど、

「だがな、磯山」

先生の方が早かった。

「相手は去年、関東大会で個人優勝をした選手だぞ。そんな……」

「だから、そういうこといわないでくださいよ。こいつ、すぐビビるから……だから」

すると彼女は、また私の胴紐をつかんで、後ろの方に引つ張った。

代わりに自分が前に出る。

そこに、ゆつくり両膝をつき、正座をする。

「だから……みんなの後押しが、必要なんです。お前ならできるって、こいつに、いつてやってください。西荻、お前なら、必ず勝てるって……背中押して、そう、いつてやってください」

紺色の道着の背中が、私の足元で、小さく、丸くなる。

「お願いします。西荻に……力を、貸してやってください」

私は、それを止めることも、みんなの顔を見ることもできなくて、ただ磯山さんの、その丸まった背中を、見下ろしてただけだった。

誰も、何もいわない。③ 頭の痛くなるような静寂が、室内に立ち込める。

不思議なくらい、試合場の方も静かだった。外の世界と切り離され、この部屋だけがぼっかりと宙に浮いてしまったような、そんな錯覚に囚われる。

ふいに、**B** 誰かが前に出てきた。

「……私は、いいと思います。西荻さん」

河合さんだった。磯山さんも顔を上げる。

「別に、私が負けたから、いうんじゃないですよ。前から、いいなって思ってたんです。ほんとだよ、磯山さん」

「……あ、ありがとうございます」

あの磯山さんが、土下座のまま、また頭を下げる。河合さんは、首を振りながらそこに膝をついた。ほら立つてと、手を差し伸べる。

先生の顔は、依然険しいままだ。

「どうだ…… ※ 村浜、 ※ 野沢」

先に頷いたのは、村浜さんだった。

「河合が、そういうなら……河合の目は、確かだと思いますから」

野沢さんも、それを聞いて頷く。

立ち上がった磯山さんが、ありがとうございます、とまた頭を下げる。

先生が他の部員にも確認をとる。どこからも、異論は出なかった。

「西荻、そういうことだ。……やれるな」

でも私は、すぐには、返事ができなかった。

▼移動の間も、磯山さんはずっと私の後ろにいて、呪文のようにアドバイスを繰り返した。

「いいか。いつも通りでいいんだからな。じっくり中段に構えて、自分の距離を作れ。あつちはお前より、ちよつと背え低いから、剣先を喉元からはずさないようにして、足使って……な？
できるだろ」

確かに、最近はそうするよう、心がけてはいるけど。

試合場に着くと、ちよつと大将戦が終わったところだった。前評判通り、葵商業は中堅以外の四勝を手堅く挙げて勝ち進んできた。

あつちは連チャンになるので、ちよつと休憩が入る。その間に先生が、審判に選手交代の届けを出す。

「でも……そんなんで私、勝てるのかな」

「大丈夫。④ お前の中段は特別なんだ。とにかく、相手が誰かとか、さつき聞いたことはいったん忘れろ。自分の距離を保つ、あの動きだけを忠実に繰り返し返せ。それさえやってたら、そのうち相手は苛ついてくるから。そしたら一回くらい、チャンスがくるから。そんなときに、打てると思ったら打てばいい。無理だと思ったらまた中段。それでいいから。それで絶対、上手いくから」

C 左肩をつかまれた。私は思わず、肩越しに彼女を振り返った。

「……ほんと？」

磯山さんは、ゆっくり目を閉じて頷いた。

「ほんとに私、それでいいの？」

「ほんとだって。お前が足使って距離作ったら、そう簡単には入ってこれないって
なんで、そんなに自信持っていえるんだろう。」

「相手が入ってこれないんだったら、それが誰かなんて、関係ないだろ」

まあ、理屈ではそうだけど。

「お前がいつも注意してることって、なんだ」

それは――。

「……Xこと。雑誌で……」

「外山浩規選手か」

うわ。ちゃんと読んでるんだ。

「うん、そう……」

「なるほどな」

「それで、いいのかな……」

「いいよ、お前にはそれができる。それができれば、お前はイケる。お前がいい試合したら、絶対みんなついてくる。……ほら、行ってこい」

あれよあれよというまに、チームの列に並ばされてしまった。休憩は終わったようだった。すぐさま、試合場に入って礼。私の真正面にいる選手の垂には、確かに「杉浦」と書かれている。

そして私一人が残り、今一度礼をして、中央の開始線に立つ。

その途端、バァーッと後ろから、波のような拍手が押し寄せてきた。

いける。いや、いかなきゃ。いくんだ。

「始めッ」

蹲踞から立ち、いつも通りの中段に構える。剣先は相手の喉元――。

ほんとだ。この人、私よりちょっと小さい。他の人とやるときより、少し竹刀が下向きになる。つてことは、それだけ私のリーチが長くなってるってことだ。これは、確かに有利かも。

私は、相手の剣先が当たらない、ギリギリの距離を心がけた。当然、相手はもうちょっと入ってこようとするけど、横の動きを使って自分の間合いを作り続けた。仕切り直して相手が離れようとしたら、こっちから詰めて間合いを切られないようにする。逆に詰めてきたら、境界線に追い詰められないよう、回りながら遠間を保つ。

つい相手の竹刀や、足の動きを目で追ってしまう。でもそれでは、瞬間的な動きには対応できなくなる。もっと全体を見なきゃ。雰囲気とか、相手の「なんとなく」の「感じ」を見るんだ。

「へアッ」

きた。でも下がらなかった。メンに応じながら、相手の体当たりを受けるように踏み込む、と見せかけて左に抜ける。すれ違いながら相手の方に向き直る。ちょっといなした感じになったのか、相手の体に崩れが生じる。でもさすがだ。すぐに立て直してこっちに竹刀を向ける。

隙、あんまりないかも。

またすぐくる。でも動かずに耐えた。剣先は喉元。そのまま突っ込んできても、あなたは逆にツキを喰う恰好になるよ、簡単には入ってこれないんだよ――。と思っただら、実際入ってこなかった。

ほんとだ。磯山さんのいった通りだ。でも、なんでだろう。こんなの基本中の基本なのに。みんなやってることなのに。なんで私は、これで防衛になるんだろう。

いいや、そんなのいま考えなくても。

また大きな拍手が聞こえた。

そうだ。とにかく今は、磯山さんを信じて、みんなの力を信じて、やるしかないんだ。

コテがきた。でも途中で払った。左に回りながら距離をとる。

続けてメンがくる。今度は前に出ながら右回り。耳の辺りをかすったけど、大丈夫。私、動ける。

上の方からも、すごい一所懸命な拍手が聞こえる。あれって、久野さんたちかな。そういえば、相手の足遣いが、さっきより忙しくなくなったように見える。これって、苛ついてるってことなんだろうか。

くる。コテかメン。コテだ。鏢の辺りで応じながら右に出る。

返してメンがくる。これは応じなくていい。前に出ながら左足を引いて、小さく回りながら相手の懐を抜けていけばいい。

あつ、

「ドオオオーツ」

あんまりやったことなかったけど、入りそうだったから、逆ドウ打っちゃった。

「ドウあり」

うっそ。いや、うそじゃない。こっちの赤、三本上がってる。

ちようど反対向きになってたんで、チームのみんなや、二階の仲間たちが、歓声をあげるのが分かった。

「二本目ッ」

なんか、ふわって体が軽くなって、試合中なのに、こんな気持ちになっちゃいけないんだけど、でもそれでも、私は今、とても幸せなんだって、すごい思った。

しかし、試合は続いている。

「ンメエアーツ」

相手は、さっきまでとは全然違う戦い方を仕掛けてきた。でもそれ、絶対に焦りだって私は思った。一本取られて、取り返さなきゃって、死に物狂いになってるんだ。大きな大会で優勝するよきな選手でも、一本取られたら、平常心ではいられなくなるんだ。

そう思ったら逆に、私は冷静になれた。私は、もともと引き分けでもいいくらいなんだ。構えて逃げろって、ずっと逃げ回って、磯山さんにはいわれてる。それを、一本取っちゃったけど、でもそれは忘れて、また構えてればいいんだ。自分の距離を保って、相手をちゃんと見て、感じて。それでいい。

「テッ、メエエーツ」

見える。さっきより全然よく見える。コテは抜いて、メンは足で捌いた。相手の竹刀はかすりもしなかった。追いかけてメン入れちゃおうか、と思ったけど、すぐ向こうも手元を上げるだろうからドウにしよっかな、でも、ちよつと調子に乗ってる気がしたから、やっぱりやめて構えた。

それでも相手が突っ込んでくるから、

「ツキイイーツ」

攻めてみたけど、突き垂には当たらなかった。面金の方に浮いちゃった。ごつつ、て当たって、

相手は真後ろによるけた。すぐ構えて向かってこようとするけど、踏み込みが若干甘くなってる。これってもしかして、再びチャンス？ と思ったけど、

「やめッ」

ブザーと同時に、主審が両方の旗を上げた。

そして改めて、

「……勝負あり」

赤の旗が、私の方に上げられた。

(菅田哲也『武士道シックスティーン』より)

※飯野さん・田村さん……ベンチ外選手。

※河合さん……二年生。この試合で副将戦を務める。

※村浜……三年生で部長。この試合で大将を務める。

※野沢……三年生で副部長。この試合で中堅を務める。

問1 空らん A C にあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次か

ら一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | |
|---|------------|------------|------------|
| 1 | A ぐつと | B すつと | C ぎゅつ、と |
| 2 | A ぎらつと | B ずかずかと | C ぼんつ、と |
| 3 | A どんよりと | B そつと | C ぐいつ、と |
| 4 | A さつと | B のそのそと | C がしつ、と |

問2 次の文章は、もともと本文中にありました。どの文の後に入れるのがよいですか。本文中の▼ ▲の中から探し、その文のおわりの五字を答えなさい。

ああ、これなんだ。磯山さんが頭を下げて頼んでくれた、みんなの「力」って。私いま、みんなに、力を貸してもらってるんだ。

問3 —— 線①「重く、それでいて鋭い衝撃」とありますが、ここには「私」のどのような気持ちが含まれていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 責任重大な代役を務めなくてはならない憂うつさ。
- 2 自分の力を試す機会が与えられたことへの嬉しさ。
- 3 部長たちから反感を買ってしまったことへの恐れ。
- 4 自分自身が予期していなかったことばに対する驚き。

問4 —— 線②「先生は、どうすべきか迷っているようだった」とありますが、それはなぜですか。その理由として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 西荻をなんとかして出場させたいが、こちらが言い方を誤れば磯山が出場すると言い出しかねないから。
- 2 磯山が推薦する西荻では代役として務まらないので、どうにか磯山を説得して違う選手を出したいから。
- 3 突拍子のない質問をする磯山の真意が全くわからず、このような質問をしてきた意図を考えていたから。
- 4 磯山に対してはもちろん、その他の剣道部員も納得できる結論を顧問として出さなくてはならないから。

問5 —— 線③「頭の痛くなるような静寂」とありますが、このときの「私」の様子の説明として、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 みんなが磯山の提案に反対できずに行き詰まっている中、自分のことにも関わらず、何もできずにどうしたらよいかわからなくなっている様子。
- 2 自分のことで磯山が頭を下げていることについては大変うれしく思っているが、磯山を説得する意見が早く出ることを心待ちにしている様子。
- 3 自分の剣道の実力が認められていないことを周りの人たちの反応から気が付き、剣道部での自身の居場所を失ってぼうぜんとしている様子。
- 4 自分の意見を言わなければならないことを他の部員たちの態度から感じてはいるもの、言うべきことばが見つからずにあせっている様子。

問6 —— 線④「お前の中段は特別なんだ」とありますが、磯山は「私」の剣道の技術のどこを評価していますか。次の文の空らんにあてはまるように七字以上十字以内で答えなさい。

自分の 七字以上十字以内 技術。

問7 空らん X には、試合中の「私」の様子からうかがえる剣道の戦い方を表すことばが入ります。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 強く、踏み込む
- 2 相手の、意表を突く
- 3 長く、構える
- 4 最初に、狙い^{ねら}を定める

問8 ——線⑤「ちょっと調子に乗ってる気がした」とありますが、この時の「私」の気持ちとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 思い通りに自身の剣道ができたことで、もっと相手を攻めてみたい気持ちが生まれてきた。
- 2 対戦相手から一本目を先取できたことで、自分の剣道の技術に自信を持てるようになった。
- 3 相手の平常心を失った姿を見たことで、今までの緊張^{きんちよう}が解けて余裕^{よゆう}が持てるようになった。
- 4 みんなから「力」をもらったことで、対戦相手を攻める今までにはない勇気がわいてきた。

3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

暮らし 重永雅子

いつものように^a 目が覚めること
いつものように 水が出てくること
いつものように 食べられること
いつものように 喋れること^{しゃべ}

いつものように 歩けること
いつものように エレベーターが動いていること
いつものように 電車がホームに入ってくる
いつものように 町の人々が動いていること

どれか一つが いつもとちがうと
途端^{とたん}に暮らしのリズムが くずれる
あたりまえと思われることが
実は あたりまえではなく
どなたかの深い配慮^{はいりよ}で編みこまれているのかもしれない

ニュートンがこう言ったそうだ
わたしが万有引力^{ばんゆうりき}を発見したことは
海にいっぱい落ちている
一つの貝がらを拾った^b ようなもので
本当は もっと沢山^{たくさん}の
科学で証明できないものがある

わからないことが あるのもいい
明け方のラジオの音が聞こえてくる
「今日も一日 よい日であります^c よう！」

(『詩集 一人の時間』より)

問1 この詩の文体と形式として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 1 口語定型詩 | 2 口語自由詩 | 3 口語散文詩 |
| 4 文語定型詩 | 5 文語自由詩 | 6 文語散文詩 |

問2 ——線 a、c の「よう」をふくむことばのうち、ひゆ 比喩を表しているのはどれですか。一つ選び、記号で答えなさい。

問3 第一連、第二連を通して表されていることは何ですか。詩の中から六字以上十字以内でぬき出しなさい。

問4 この詩の中で第四連はどのようなことを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 われわれが生きている世界は、ニュートンのおかげで多くの利益がもたらされるようになったということ。
- 2 われわれはよくわからない世界に住んでいるので、もっと科学的に考えなければならぬのだということ。
- 3 われわれがあたりまえと思っ**て**住んでいる世界は、ニュートン以前はわからないことだらけだったということ。
- 4 われわれが住んでいる世界には、あたりまえすぎて気にしていないだけのこと**が**たくさんあるのだということ。

問5 この詩について説明した文として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の暮らしについての考え方に続いて日常生活のさまざまな場面を細かく描き、少々意外な視点からの見方をはさんだ後、自分のあり方を反省している。
- 2 自分の暮らしの例をいくつか並べ、それがどうい**う**ものなのかを科学的に説明し、今後どのように生きていくべきなのかを冷静に自問自答している。
- 3 日常生活の具体的な場面を思い出しながら自分の暮らしについて考え、一見関係なさそうな話題を持ち出した後、前向きにいつもどおり生きようとまとめている。
- 4 読む人の意表を突く日常生活の表現からはじまり、それがよく考えれば驚くほどのことではないことを示した後、気楽に生きていこうと呼びかけている。

4 次の①～⑦について、後の問いに答えなさい。

- ① 彼は友人からの信頼がアツい。
- ② この意見についての可ヒを問う。
- ③ 機械のセイ作に取り組む。
- ④ あらかじめ危ケンを察知する。
- ⑤ 1 集 2 末 3 果 4 机
- ⑥ 1 視 2 社 3 祖 4 神
- ⑦ 1 服 2 期 3 肥 4 望

問 1 ①～④の——線部を漢字で書くとき、それぞれの部首名は何ですか。その部首名をひらがなで答えなさい。

問 2 ⑤の中で、一つだけ部首が異なるものはどれですか。番号で答えなさい。

問 3 ⑥の中で、一つだけ部首が異なるものはどれですか。番号で答えなさい。

問 4 ⑦の中で、「にくづき」を部首とするものはどれですか。番号で答えなさい。

